



生活ノオト⑥

「経済更生を基調とせる更生訓村訓村歌民謡類集」  
 左：〔経済更正叢書第14編〕〔官省公報類509〕〔昭和9年10月、山口県内務部〕  
 右：〔経済更正叢書第34編〕〔官省公報類508〕〔昭和12年6月、山口県経済部〕

## 団結の音

### 【「経済更生運動」の音】

昭和恐慌のもたらした経済的な閉塞状況を打破すべく、政府（内務省・農林省）主唱で展開されたのが「時局匡救（きょうきゅう）政策」と「経済更生運動」であり、主として農村の立て直しにフォーカスが当てられました。

時局匡救事業は、土木事業に資金を投入して雇用を創出、そうしてもらされた収入による農村の経済的な復興をねらったものです。大規模な道路改修、河川改修が実施されました。

一方で「経済更生運動」は精神的な側面が強く、真摯に日々の労働に取り組むこと、儉約を美德とすることなど、「自力更生」が強調されました。そして、労働の共同化が色濃く打ち出され、やがては人心統制の領域に人々が躊躇なく足を踏み入れることにつながり、後の総動員態勢への序章となってしまったとも言われています。

「農山漁村経済更生計画樹立方針」の下、経済更生運動が始められたのは、昭和7年度のことです。県下では、昭和11

年度末までの5年間に全市町村での計画樹立が目指されました。昭和7年に表明された「産業五ヶ年計画」に沿ったかたちでの「経済更生運動」の展開が期待されました。つまり、「経済更生計画の樹立」＝「経済実態の把握」＝「経済統制」という図式が描かれていたということなのです。昭和12年6月以降の第二期更生計画樹立推進期間においては、国民精神総動員運動に即応した「よりいっそうの民心作興」を盛り込んだ計画樹立が求められることになりました。

このように経済更生運動には、精神的で窮屈な側面が強かったと言えるのですが、一方で、その理念を「親しみやすく接しやすく」表現することによって、人々の日常生活に浸透させる工夫もほどこされていました。「ウタウ」「ツバヤク」「ヨミアゲル」。「音」の効能が最大限発揮されることになったのです。音感を共有することにより団結を深めよとの意図を史料から読み取ることができます。

「更生訓」「町村是」「綱領」のようなストレートなものに加え、敷居が高くなく、かつ、

三隅村歌  
 一 三隅村 作詞者 自土良村  
 二 山並にのり月澄みて 清き風をしまはせ  
 三 三隅村産土といへど 更生の二川をたしなむ  
 日の本の興をなむまはせ こそよりぞまはせしむら

「三隅村歌」  
 (官省公報類 509)

経済更生運動推進の精神的な支柱として利用されたのが、「声」や「歌」など、「音」の響きが醸し出す一体感や高揚感でした。作詞にあたったのは農事組合長や経済更生指導員、そして訓導や教師でした。「意気込み」「目標」が高らかに唱えられていたのです。

平易な言葉や聞き慣れた節回しにのせて口ずさむことによって、目標や方向性を共有できるように、「更生歌」「町村歌」「民謡」「小唄」などがつくられました。

県が発行した更生計画樹立のためのテキスト（経済更正叢書）にも、郷土色を盛り込んで親しみやすく、町村や部落の行事や共同作業の場面で口ずさんだり踊ったりすることによって知らず知らずのうちに心がひとつになり「やる気」が起きるコンテンツとして「歌」が推奨されました。「手拍子揃えば気も揃ふ！」「自然人心融和統合！」「老若男女ぞぞって謳歌口誦！」「和気藹々のうちに更生への一大行進！」「音」がもたらす一致団結のムードが期待されたのです。

【若者の歌】

右下の写真は、青年団活動のさまざまな場面で声を揃えて歌われた楽曲をまとめたものです。青年団月例会の式次第には、「国歌斉唱」に加えて「防長青年歌合唱」が掲げられていました。この「歌集」には、防長県民歌を手がけた東京音楽学校教授信時潔が作曲した「防長青年歌」、のちに多数の経済更生歌の制作にかかわることになる山口高等女学校教諭白上貞利作詞の「防長青年団歌」などが含まれています。歌詞には「百万一心」の文字が躍り、思想善導を意図した時代の影を否定することはできません。若者の社会的紐帯を生み出す装置として、集団での朗唱が重視されていたことがわかります。

戦後になると、歌声喫茶、喧噪の中でのシュプレヒコール、そして、フォーク、ロック、表現方法にちがいはあるにせよ、若者の祝祭には歌や音が欠かせませんでした。昨今、数万人規模で若者を動員する各地の「夏フェス」も同じ流れに位置する表現形態なのかもしれません。歌を介してひとつになる。現代の個人社会を生きる人々に、歌が安心感や連帯意識をもたらしているのかもしれません。

【団結の歌をうみだした人「白上貞利」】

白上は吉敷郡宮野村出身。山口県師範学校卒業後、山口県師範学校、大津高等女学校、山口高等女学校で教鞭をふるった国語教師。自身の書齋を「桜園山房」と名付け文筆活動にあたっていました。青海島や須佐湾の観光案内書の執筆者としても刊行物にその名前が記されており、観光開発の関係で、横山健堂や高島北海との親交もあったようです。また山口高等女学校学芸部の指導者として、校友会誌『森の下蔭』の発行や、山口の方言調査にあっています。

こうして蓄積された、地理・歴史・文化・風土など、白上の郷土にまつわる博識が、経済更生歌の作詞に反映されたのです。戦後になるとそうした知識は親和的な団結のよりどころとして校歌の歌詞などに活かされることになりました。



村歌・小唄の一例  
「仁保小唄」（官省公報類509）



「山口県男女青年歌謡曲集」（昭和7年6月）  
（行政資料1930年代市町72）